

研究課題（テーマ）	レビー小体型認知症の人が体験する幻視の理解に向けた教育プログラムの開発		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部看護学科	助教	米山真理
	石川県立看護大学	教授	川島和代
	石川県立看護大学	准教授	中道淳子
研究結果の概要			
【背景背景と目的】 レビー小体型認知症（dementia with Lewy bodies；以下 DLB）では、8 割以上の方が幻視を経験する。DLB の幻視は、「本物にしか見えない、自分では偽物と区別できない」と語られるほどに存在感がある。DLB を有する人は、このありありと見える幻視に戸惑い、混乱し、幻視を他者にわかってもらえない苦痛を訴えている（Akiyo 他,2019）。一方で家族も幻視に混乱し、対応が上手くいかないという悩みを抱いている。幻視の対応の難しさには、幻視は DLB の人にしか見えず他者にはどのように見えているのかわからない点が挙げられる。そこで、本研究では他者には見ることでできない DLB の人が体験する幻視を、第三者が理解し対応に活かすための視覚教材の開発を目指す。その第 1 段階として、本研究の目的は DLB の人と家族の語りから幻視の様相を明らかにすることである。 【研究方法】 研究デザインは質的記述的研究である。研究の同意が得られた DLB の当事者 10 名と、その家族 10 名を研究対象者とした。調査内容は基本属性（年齢、性別、続柄等）と、DLB 当事者に対しては幻視でどのようなものが見えるか等、家族に対しては幻視にどのように対応したか等についてのインタビューを行った。得られたデータは質的帰納的に分析を行った。本研究は富山県立大学「人を対象とする研究」倫理審査部会の承認を受け実施した。 【結果】 令和 6 年 4 月末現在、7 組の DLB 当事者と家族にインタビューを実施した。DLB 当事者は 40 代から 70 代の男性 3 名、女性 4 名であった。家族は 30 代から 70 代の男性 3 名、女性 4 名であった。DLB 当事者と家族の語りから、幻視の出現する場合の身体状況や精神状況に関する特徴を見出した。			
今後の展開			
研究対象者は 10 組を目標としており、残り 3 組のインタビューを行い、データ分析を継続する。研究成果を踏まえ、DLB の人が体験する幻視を、第三者が理解し対応に活かすための視覚教材の開発につなげる。本研究結果は国内学会、学術誌にて成果発表する予定である。			